大嶋栄子［著］
**傷はそこにある**
――交差する逆境・横断するケア

四六判並製・日本評論社
2024年12月刊
定価2,640円（税込）

評者＝**橋本和明**（国際医療福祉大学大学院）

薬物や物質の依存に陥った女性，虐待やDVという暴力の物語の当事者になった女性，あるいはジェンダーの壁に自由を奪われた方とかかわっていると，“傷はそこにある”と感じることがある。しかし，その傷に無造作に触ろうものなら，相手は致命的な傷を受け，下手をするとこちらも傷を負う。つまり，その傷には安易には触れられないし，本人自身もあえてその傷をケアされることを望まない。いや，ケアされることを望みながら同時にそれを恐れてもいるという方がしっくりくる。

本書はこのことをテーマにかかげ，それでもその傷にいかに触れ，言葉にならない彼女らの「助けて！」のメッセージに応えようとしている。著者はこれまで精神科病院の依存症病棟でソーシャルワーカーとして働き，退職後は自身でNPO法人「リカバリー」を立ち上げ，女性依存症者の生活支援をするグループホームの運営に携わってきた。そして，刑務所で行われる依存症回復支援モデル事業にも参画し，塀の中にいる女子受刑者の立ち直り支援をも数多く手がけてきた。ある意味では本書はそんな著者のこれまでのソーシャルワーカーとしての実践記録そのものであると言ってよい。

この中で一番に主張していることは，“傷はそこにある”とわかっていてもすぐに手当てできないつらさであり，もどかしさである。支援を受ける彼女たちも傷ついた自分の身体感覚をどこかに置き忘れ，感じることさえ回避しまう。それは精神科病院でもグループホームでも，刑務所でも共通している。それでもその傷を放置するわけにはいかず，「傷と共に生きる彼女たちをひとりぼっちにしないこと，誰かが必ず彼女たちの傷に気づき，彼女たちがその傷について語り始める際にはその語りに耳を傾けることだ。その意味で彼女たちを見ている人は，いろいろな場にいる必要がある。住む場所を変えても，仕事をしていてもしていなくても，活躍していても塞ぎ込んでいても，複数の人たちが彼女たちの傷を感じながら，その傷を生きている彼女たちと共に生きるのだ。彼女たちの傷を忘れないでいること，それはたしかに私にもできることだ」。

だからこそ彼女たちに，「その場に『ただ居ること』を大切にするように」，愛をもらい損ねた彼女たちに，「人はいつからでも，どのような状況であっても，人との間で（できれば複数の人たちがよい）安全基地をつくりなおしていくことができる」と伝える。そして，密着した二者関係の中でしか生きられなかった彼女たちが，人との安全な距離感を練習する際には“ちょっと寂しい”がちょうどいい。「すごく寂しければ耐えられないが，“ちょっと寂しい”という感覚はどんな人にとっても自然であり，人間関係を長続きさせるのはちょうどいいのだと，その寂しさに慌てながらも学んでいく必要がある」と，彼女たちの回復のプロセスを鋭い視線で考察し，“そこにある傷”への適切な処方箋を手渡す。それはどこかから借りてきた理論やプログラムの解説本とは違う。著者がこれまで“傷はそこにある”とわかっていても適切に手当できなかった苦悩からにじみ出た赤裸々な実践記録であり，支援者としてあるべき謙虚な心構えが映し出されている。

誰しも傷つきを経験する。子どもであっても大人であっても，男性であっても女性であっても。しかし，その傷をすぐに手当てしてもらえる人もいれば，見逃される人もいる。見逃された傷ほど痛みを感じるだろう。そして，身体的な傷と違って，心の傷は見えにくいものである。ましてやその傷が深ければ深いほど，傍目にはわからないように平気なふりをして傷を隠してしまうため，なおさら外からはわからない。ゆえに，“傷はそこにある”とわかっているのに，傷ついた人もその傷をどうすればよいのかわからず，周囲もその傷に触れようにも触れられない。だからこそ，傷ついた人も手当てをしようとする支援者もこれ以上その傷に苦しまないようにその場を共有し，時間はかかれど，いつかはその傷とともに生きていけるようにと願うのである。対人援助職だけではなく，人間関係で苦悩されている方には是非とも読んでいただきたい本である。



2026/09/17 12:13:27